

## 総合大学医療・福祉4学科「むさしのIPE」活動紹介 と今後の展望

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 摂子, 栃原, 綾, 嶋田, 真理子, 畠山, 恵, 益戸, 智香子, 高尾, 良洋, 吉井, 智子, 稗田, 里香, 小俣, 智子, 後藤, 優子, 三觜, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1595">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1595</a>

## 総合大学医療・福祉4学科「むさしのIPE」活動紹介と今後の展望

山本 摂子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 看護学部 講師

栃原 綾

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 看護学部 助手

嶋田 真理子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員  
武蔵野大学 大学院人間社会研究科 人間学専攻言語聴覚コース／専攻科言語聴覚士養成課程 助教

畠山 恵

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員  
武蔵野大学 大学院人間社会研究科 人間学専攻言語聴覚コース／専攻科言語聴覚士養成課程 助教

益戸 智香子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 薬学部 臨床薬学センター 講師

高尾 良洋

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 薬学部 臨床薬学センター 准教授

吉井 智子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 薬学部 臨床薬学センター 講師

稗田 里香

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 人間科学部 教授

小俣 智子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 人間科学部 教授

後藤 優子

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員  
医療法人社団碧水会長谷川病院 精神看護専門看護師

三觜 久美子

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員 元 武蔵野大学 看護学部 助手

### 要約

わが国では、地域包括ケアシステムの推進を受け、専門職連携教育（Interprofessional Education：IPE）が重要視されている。本学では、2015年度よ

り、看護学部、社会福祉学科、大学院言語聴覚コース・専攻科言語聴覚士養成課程、薬学部の教員が「むさしのIPE」として協働、Musashino University Creating Happiness Incubation（武蔵野大学しあわせ研究所）における活動をしてきた。本稿では、活動紹介としあわせ研究の視点から「むさしのIPE」の今後の展望について考察した。活動に参加した医療・福祉系学生は専門職連携を学び、教員は教員同士の連携と学生の成長に触れ、しあわせを得ていた。また非医療・福祉系学科学生も所属学科の学びを健康や医療に役立つ成果を得られ、SDGs：目標3「すべての人に健康と福祉を」達成につながる可能性があると考えられた。

## 1 はじめに

わが国では、医療の高度化および少子高齢化による地域包括ケアシステムの推進を受け、福祉職を含めた保健・医療・福祉領域による新たなチーム医療が求められている。それら保健・医療・福祉職の連携・協働の概念としてインタープロフェSSIONナル・ワーク（Interprofessional Work：以下、IPWとする）がある（Leathard,1994）（佐藤,2009）（O'Carroll,2016）。このIPWに加え、近年では専門職間で連携する力を学生時代から養うため、専門職連携教育（Interprofessional Education：以下、IPEとする）が重要視され（朝比奈,2011）（山本ら,2013）（長田,2019）、医学部を有する大学を中心に、医療系学科横断型および学年縦断等、多数の報告がある（齋藤,2018）（小河原,中,藤田,2018）（外里,2018）（牧野ら,2018a）（榎田ら,2018）（小山,2018）（新井,田口,川俣,2018）（真柄,2018）（牧野ら,2018b）（渡邊ら,鎌田,2018）。

本学では2015年度に看護学部、社会福祉学科、大学院人間社会研究科人間学専攻言語聴覚コース／専攻科言語聴覚士養成課程（以下、言語聴覚コースとする）、薬学部の医療・福祉系4学科の教員が協働し「むさしのIPE」を立ち上げ、活動してきた。また、教員が所属する学部学生に対する専門教育と併せ、「むさしのIPE」はMusashino University Creating Happiness Incubation（武蔵野大学しあわせ研究所）における活動をしてきた。これは、「むさしのIPE」において、「IPWやIPEは、医療や福祉専門職の連携と協働、つまり専門職がつながるといふしあわせを育み、医療や福祉を受ける人々にもしあわせをもたらす」と考えていることが根幹にある。

そこで本稿では、発足から丸6年が経過した「むさしのIPE」の活動を紹介します。医学部を有さない総合大学の特色を活かしたIPEについて新たな示唆を得ることを目的として、「世界のしあわせをカタチにする」しあわせ研究の視点から、その効果と今後の展望を考察する。

尚、本研究は、武蔵野大学しあわせ研究所倫理委員会の承認を得ている（受理番号：2019-001）。

## 2 活動紹介

### (1) 「むさしのIPE」の成り立ち

「むさしのIPE」は、2015年度より社会福祉学科授業を担当となった看護学科教員と社会福祉学科教員の出会いから始まった。医療ソーシャルワーカー（Medical Social Worker：以下、MSWとする）として活躍していた社会福祉学科教員と20年臨床看護師をしていた看護学科教員は、すぐに意気投合し、「医療現場での専門職養成を担う者として、連携してなにかできたらいいね」と話した。その後、開設直後の言語聴覚コースおよび薬学部教員に声をかけ4学科の教員が集まることのできた。

顔合わせの場で、4学科教員は「学科を超えてつながったことをどのように活かせるのか」「連携して何ができるのか」という思いを共感した。そして、定期的なミーティングを実施してディスカッションするようになった。ミーティング会場は、それぞれの学科の研究室や会議室を交代で利用し、校舎や他学科の雰囲気を感じることから始まり、月1回の定例ミーティングから、「なにかできること」への模索が始まった。そこで着目したのがIPEである。

2015年当時、我が国でのIPEは、主に医療系学科および学年の横断型授業が報告されていた。しかし、本学4学科は、学部、大学院、専攻科に分かれた専門職教育、薬学部6年制のカリキュラム等が障壁となり、横断型授業としてのIPEは実施困難であった。そのため、IPEを「医療・福祉専門職の初学者たちが、互いを知り、学び合う交流の場」とすることを目的とし、授業期間外での半日から1日のイベントとして開催することとした。イベント開催であっても医療・福祉専門職（薬剤師、看護師、言語聴覚士、社会福祉士）をめざす学生と教員が、他の専門職との際を知りその共通性を建設的に共有できる意識づく

表1 むさしのIPE 活動紹介

	2015～2016年度			2017年度		2018年度		2019年度	2020年度
イベント回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回
開催時期	2016年 2月	2016年 9月	2017年 2月	2017年 9月	2018年 2月	2018年 9月	2018年 2月	2019年 9月	2021年 2月
時間	平日	1日	平日	1日	平日	1日	平日	平日	2時間
プログラム内容	事例 検討	技術 体験	事例 検討	技術 体験	実習体験 発表会	技術 体験	実習体験 発表会	技術 体験	実習体験発表会 (オンライン)
参加学生数 (人)	19	38	40	21	20	20	35	14	23
授業担当	なし			なし		なし		・建学科目 「しあわせを考える」 ：オムニバス 2コマ 担当	・建学科目「しあわせを考 える」 2019年度以降 ・客付講師「高齢者の健 康」：オムニバス、8コマ担 当(いずれもオンライン)
ミーティング 回数	19			14		15		15	11(オンライン)
備考	・2015年後期に活動開始 ・月1回ミーティング開催			・メンバー全員がしあわ せ研究員となり、しあわ せ研究費申請		・JAIPB*にて発表(最 優秀ポスター賞) ・千葉大学IPE見学 *JAIPB：日本保健医療連携教育学会		・両キャンパスにて 授業実施 ・2月イベント中止	・看護学部有明キャンパ スに移転 ・9月イベント中止

りとなり、専門職連携教育につながると考えたからである。そして、この集まりを「むさしのIPE」と名付け活動していくこととした。

## (2) むさしのIPE 活動紹介

発足したむさしのIPEは、2021年3月までに「イベント開催」「全学横断型授業担当」「定例ミーティング」の3つの活動をしてきた。活動の詳細は表1に示した。

### ① イベント開催

第1回のイベントは、4学科学生混合のグループが「事例へのケアや関わりをディスカッションする」こととし、年度の授業終了後の2016年2月に武蔵野キャンパス5号館大会議室にて開催した。4学科の学生たちが、グループとなり、事例を巡って真剣に、時に笑顔でディスカッションやまとめ作業を行う姿に、教員は手ごたえを感じた。

2016年度からは、4学科学生が一堂に集える夏季休暇、春季休暇中に年2回のイベントを企画した。内容は専門職の技術を体験できる「体験型プログラム」と前年度実施した4学科混合グループでの「思考型プログラム」とした。その後、2017年度からは「思考型プログラム」を「実習体験発表会」に変更し、2021年3月までに10回のイベントを開催した。参加した学生は延べ230名である。各プログラムの詳細は次の内容であった。

・体験型プログラム

体験型プログラム（以下、技術体験）は、主に4学科の初学者（1、2年生）を対象とし、他専門職への興味や関心を持つきっかけ作りを目的とした。

第4回技術体験のプログラムは次の内容であった。「体験ツアー」と称し、各学科の技術が体験できるようなプログラムとした。言語聴覚士体験は「拡大・代替コミュニケーション」「嚥下調整食の体験」、薬剤師体験は「各種剤形の確認と溶解」、社会福祉士体験は「ブラインドウォーク」、看護師体験は「フィジカルアセスメント」であった。図1に第4回体験型プログラムについて、看護学生の変化を公表したポスターと技術体験プログラムの詳細を示した。参加した学生たちの大部分から、他職種への興味・関心が持て、将来に役立つ等の評価を得た。

図1 体験型プログラム「体験ツアー」紹介



図2 思考型プログラム「実習体験発表会」紹介

総合大学医療福祉系4学科専門職連携教育の試みを開催して—  
瀧子<sup>1)</sup>、益戸智香子<sup>2)</sup>、小俣智子<sup>4)</sup>  
言語聴覚コース  
武蔵野大学

### 第5回 むさしのIPE 臨床実習体験発表会 10:00~16:10

- 事前アンケート、趣旨説明
- 自己紹介(学科混合グループ)  
**実習体験発表: 学生からのプレゼンテーション**  
 ① **看護学科**: 参加学生7名が本発表会用に資料を作成して発表  
 ② **言語聴覚(Speech Language-Hearing Therapist: 以下ST)養成課程**: 参加学生のうち1名が臨床実習報告会資料(症例報告)を用いて発表  
 ③ **社会福祉(Social worker: 以下SW)学科**: 参加学生のうち1名が実習報告会資料をもとに発表  
 ④ **薬学科**: 参加学生のうち2名が病院薬局実務実習・保険薬局実務実習報告会資料を用いて発表  
 ※教員から各学科毎の実習カリキュラムマップ配置について補足説明
- スモールグループディスカッション(学科混合グループ)  
 テーマ「実習前にIPEで体験したかったこと」
- 振り返り、事後アンケート

**【方法】**  
 対象は本学の医療・福祉系学科に在籍する臨床実習履修後の学生とし希望者を募集した。  
 各プログラム参加前後にアンケートを実施し、効果を検討した。  
**【倫理的配慮】**  
 参加者に研究の主旨、個人情報の保護、参加は自由意志であり不参加による不利益は生じないことを口頭および文書にて説明し、アンケートの提出を持って研究参加の同意が得られたものとした。

**臨床実習実施学年・時期・実習期間**

**【結果】** 各職種に対する理解度の変化(参加者全体) ※グラフの数字は人数

理解度	【SW】		【ST】		【薬剤師】		【看護師】	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後
理解している	7	14	5	17	5	14	9	17
まあ理解している	4	6	8	3	10	6	9	3
あまり理解していない	9		6		4		1	
全く理解していない								

※参加前の理解度は、全職種において「理解している」との返答は50%を下回り、特にSWに関しては45%の学生が「あまり理解していない」と返答した。  
 「-」: 理解していないから「+」: 理解している「+」への変化率は、SW>ST>薬剤師>看護師の順で大きかった。  
 ※参加後の理解度は、「全く理解していない」「あまり理解していない」学生は0%、70~85%は「理解している」と答え、全職種でほぼ同程度の理解度に到達した。

**※事後理解についての自由記述より**  
 ・スモールグループディスカッションがとてもよかった。・様々な話を聞くことができた。・発表やディスカッションから学ぶことができた。  
**※自由記述より**  
 ・自分たちだけでなく、他学部の人たちも楽しく大変なことがわかり頑張ろうという気持ちになった。実習の時の心遣いを共有できてよかった。  
 ・いろいろな職種について深く知れたことにより、どの職種を履けたいかを考えることができるようになったと感じた。  
 ・現場では他職種の人に話しかけずらいが、同じ大学に通う学生には些細な質問も聞きやすかった。  
 ・むさしのIPEは、医・薬・看のみでなくSWやSTとも開かれ良い経験になった。  
 ・実習で関わった職種についてわからないこともあったが、話すことで少し理解できた。  
 ・自学科の実習は、自ら問を考えて患者さんと積極的に関わる機会が少なかった。もっと自分で考えて発信していく練習を行いたいと感じた。  
 ・他学科と勉強を目的としたりして交流する機会が無いので良かった。他学科と実習で大変だったことを話す機会がなかったため、貴重な時間になった。  
 ・職種は違っても共感や同じような考え方をもちいることに気づけた良かった。  
 ・実習の大変さという共感しやすいテーマで始まり、新しい意見が出て、さらに共感することができた。  
 ・他職種の知らない側面を多く知ることができて、とても有意義な企画でも感じた。

**【考察】**  
 4学科合同での臨床実習体験発表会は、互いの専門に沿った実習内容の情報交換に加え、臨床実習での体験の共有を専門職の際を超えてもたらしていた。臨床実習発表会は、視点が異なる専門職同士の共通点の実感と互いの理解と連携の重要性を学ぶ機会となったことが示唆された。臨床実習という共通体験がある学生たちが交流し連携する機会を持つことは、今後の実習や学習のみならず専門職としてのキャリア向上につながることを考えられた。

本研究はMusashino University Creating Happiness Incubation(武蔵野大学しあわせ研究所)しあわせ研究員を受けて実施しています。

・ 思考型プログラム

思考型プログラムは、専門的な学習が進んだ3年生以上の学生を主な対象と互いの職種の専門性・共通性の理解と卒業キャリアへの活用を目標として第1回、第3回と4学科学生がケアや介入を検討する事例検討とした。しかし、半日という短時間でのグループダイナミクスに課題があった。そこで、学年が進み、学生たちにとって重要かつ印象的な実習体験を共有するプログラムに変更した。事例検討と実習体験発表、どちらも参加した学生たちの大部分から、他職種への興味・関心が持て、将来に役立つ等の評価を得た。特に実習体験発表会では、学生たちは将来就労するだろう臨地において、不安や緊張を伴いながらの学習であったと学科を越えて共感していた。また、学生たちの心に響いた

のみならず、教員たちが、実習形態の4学科の相違を誰よりも学ぶ機会となっていた。図2に思考型プログラム「実習体験発表会」について、看護学生の変化を発表したポスターと実習体験発表会プログラムの詳細を示した。

2020年度のイベント開催は2月の実習体験発表会のみであった。初めてオンラインで実施したイベントであったが、参加学生は集中して、主体的に発表やグループディスカッションに参加していた。

イベント参加学生には、研究の主旨、個人情報の保護、参加は自由意志であり不参加による不利益は生じないことを口頭および文書にて説明し、参加前後でアンケートを依頼した。アンケートでは、4学科専門職についての理解度を尋ねたが、自学科を含めた全ての専門職について、参加前よりも参加後の理解度が向上していた。特に、養成校や免許取得者がまだ少数である言語聴覚士、医療系学科では学ぶ機会が少ない福祉の専門職である社会福祉士についての理解度が上昇していた。2020年2月のイベントでは、初めてオンラインを使用してアンケートを実施した。自由記述欄には参加により専門職理解が深まったとの回答が数多く得られた。

## ② 定例ミーティング

2015年から開催している定例ミーティングは、2021年2月には74回を数えた。メンバー全員が、大学での授業や演習、と臨地での実習と多忙な中で、月1回の1時間弱のミーティングをほぼ毎月実施している。継続の理由は、第一に「むさしのIPE」メンバーである医療・福祉系学科の教員は、医療現場での連携や協働の重要性を認識していることにある。メンバーは、教員就任前の現場での経験を活かして教育を実践している。連携や協働が、「挨拶や一言の会話から始まる」「顔を見ながら話す機会をもつことが大切である」と思い、行動しているのである。第二にプログラムを企画し実践する中で、互いがつながり自分たちの専門性を活かし、できることを持ち寄りながら学科を超えて同じ時間を過ごしていることにしあわせを感じているからと考える。

2021年度は、4月の看護学部の有明キャンパス移転を控え、ミーティング方法の変更を検討していた3月に、新型コロナウイルス感染症の世界的な流行の影響を受けて、本学も入校禁止となった。その後、オンライン授業の方針が出されたため、オンライン（ZOOM）を活用したミーティングを開催した。例年



図3 建学科目「しあわせを考える」授業紹介

**【授業の概要】 建学科目「しあわせを考える」オムニバス授業：講義スケジュール**

授業回	授業タイトル	担当教員	授業回	授業タイトル	担当教員
第1・2回	武蔵野大学がなぜしあわせを考えるのか	西本照真 学長	第9・10回	SDGsを通して自分と世界のしあわせを考える	グローバル学部グローバルビジネス学科 土井隆司 教授
第3・4回	哲学倫理学の観点から「しあわせ」について考える	教養教育部会 一之瀬 正樹 教授	第11・12回	特別講義 幸福学入門	慶應義塾大学大学院システムデザイン研究科 新野隆司 教授
第5・6回	立場が違う人の体験からしあわせを考える	むさしのIPE	第13・14回	国際的視点から見たしあわせ	法学部政治学科 Donna Weeks 教授
第7・8回	経済としあわせを考える	経営学部経営学科 渡部博志 准教授	第15・16回	持続可能でしあわせな社会を考える	工学部環境システム学科 高橋和枝 教授

**履修者：70人**(2年生、3年生、4年生)

所属学科	日本文学文化 (以下、日文)	グローバル コミュニケーション (以下、GC)	日本語 (以下、JC)	グローバルビジネス (以下、GC)	法律	経営	会計ガバナンス (以下、会計G)	人間科学 (以下、人科)	社会福祉 (以下、社福)	環境システム (以下、理シ)	建築デザイン (以下、建字)	合計 (人)
武蔵野キャンパス	11					2			10	1	5	29
有明キャンパス		3	4	1	1	13	3	2	12		2	41
合計(人)	11	3	4	1	1	13	5	2	12	3	5	70

**「しあわせを考える」第5・6回授業 5月10日(金)@武蔵野キャンパス 5月24日(金)@有明キャンパス**

<p>1 講義：本学医療福祉系学科で取得可能な資格を中心とした医療福祉専門職の紹介 ※教員から担当専門職について補足説明</p> <p>2 専門職体験 ①看護師体験：触診、聴診器、経皮的酸素飽和度測定器を用いたフィジカルアセスメント ②言語聴覚士体験：拡大・代替コミュニケーション ③薬剤師体験：薬剤の飲み合わせ等の実験</p> <p>3 自己の体験をもとにした学科混合グループ(4~6人)での意見交換と発表 テーマ「医療・福祉を、学び提供する人及び受ける人に自分たちはどのように関わることができるのか」</p> <p>4 リアクションペーパー記入</p> <p>5 レポート提出 テーマ「立場が違う人の体験からしあわせを考える —自分とは立場の違う人への関わりと所属学科との学びとの関係から—」</p>	 <p>自己体験：聴診器等を用いたフィジカルアセスメント</p> <p>言語聴覚士体験：拡大・代替コミュニケーション</p> <p>薬剤師体験：薬剤の飲み合わせ等の実験</p>
--	---

**【学生が得た学び】 意見交換、リアクションペーパー、レポートより抜粋**

**やってみよう！ やってみたい...**

1. 体験、意見交換から気づいたこと、考えたこと

- 体験
  - 医療体験全体
    - ・初めての体験、良い体験、楽しい、繊細、難しい、貴重、新鮮
    - ・正しい知識が必要、もっと知りたい
  - 専門職体験
    - ・看護師：(心音を聴き)生まれてくる実態、道具を使用して身体を診ている
    - ・言語聴覚士：言葉を介さないコミュニケーションの難しさ、相手の立場に立たないでほしい、もっと知りたい
    - ・薬剤師：使命感と責任感、ミスが許されない、丁寧な細かい作業
  - 意見交換
    - ・濃密な交流、他者への関心、興味をもつことが大切
    - ・相手の思いやり、配慮することが大切
    - ・自分が能動的に何かを得るために行動する
- 2. 自学科での学びと関連づけて考えたこと
  - ・日文：文字で発信する、日本文学の特長である心のよからさを活かす、文字や言葉で自分の心を伝えたいものを感じた
  - ・GC/JC/GC：コミュニケーションはすべての基本で重要、相手の立場に立つ
  - ・法・政治：電子化や機械化、医療責任者の検討、医薬品購入についての政策検討
  - ・経営・会計：起業を通して経営者層の拡大、ビジネス理論を学び企業や社会を支え、土台をつくる
  - ・人科：より人に寄り添い関心している人を助けたい
  - ・社福：産学で学んだ連携の重要性を実感、自分の分野の学習を深める
  - ・建築・環境：障害や使用目的(病院など)に応じた空間設計、環境への配慮
- 3. 学びの特徴
  - 武蔵野キャンパス：自分と人とのつながり、生きる権利、支えあうことが大切。  
しあわせのために自分ができるところから始める
  - 江戸川乱歩著「平虫」の主人公は現代なら救われた、文字や言葉で伝えることができない人の立場で考える機会となった(日文)
  - 講義で学んだ連携の意味を少し体験できた
  - 具体的な医療福祉連携をイメージできた(社福)
- 有明キャンパス：自分と人とのつながり、関心、自分ができることに加え、支えあえる関係性を築くことにしあわせを追求する
- 支障も苦痛を伴う、受ける側も提供する側にもストレスがあり負担を減らさないとしあわせでなくなる(人科)
- 医療者のしあわせを考えたい、関係者がより良く過ごせる環境を法律から読取(政治)

**意見を ありがとう！**

4. 学生たちの考えるしあわせ

自分自身はどうする？ 知識を得て行動する！

- ・知らないことを積極的に行動する自分を大切に育てる
- ・自分の知識を深めて人の役に立てる社会人になる
- ・自分の関心にはどうする？ 積極的コミュニケーションを！
- ・自分自身の関心を変え、目標の気持ちをもっと共有
- ・コミュニケーションできる、人のしあわせは一人では実現できない
- ・自分ではない人とうとう？ 関心をも、関わり、尊重してつながる
- ・物入案でなく、状況に合わせて考えよう
- ・相手の立場に立ち、なにができるのかを考える
- ・相手のしあわせのあり方について敬重になる
- ・互いに尊重し、思いやる心が大切
- ・少しでも多くの人の役に立ち、健康で安全な暮らしを提供する
- ・人と人が話し合い、互いの気持ちを理解
- ・文字や知識だけで通っても通じあえる

**なんとかなる！ しあわせは？**

**【考察】**  
授業を受けた学生たちはそれぞれが学びを得ていた。「むさしのIPE」が実施した体験型授業は、医療系学科以外の学生であっても、医療・福祉における発展の可能性に加え、しあわせを考える機会となった。本授業は、医療・福祉系学科を有する総合大学におけるIPEとして、我が国の医療・専門職にとどまらず学科の違いを乗り越えた拡張的意義があると考えられた。

本研究はMusashino University Creating Happiness Incubation(武蔵野大学しあわせ研究所)からの研究費を受けて実施しています。

通りの授業ができず、オンライン等への変更を余儀なくされる慌ただしい毎日であった。その中で、空間の共有のない、奥行きのない画面での会話であっても、月に1度メンバーの顔を見て言葉を交わすとほっとするのである。学科を超えた「つながり」にしあわせを感じることに変わりはない。

③ 全学横断型授業の担当

「むさしのIPE」の活動は、前述の理由により、医療・福祉系学科の授業としての開催は困難であったが、2019年度より建学科目「しあわせを考える」において、オムニバス形式の2コマを担当してきた。授業は、全学科全学年が履修可

能であるため、初学者を対象とした〔体験型プログラム〕イベント開催の経験を活かして実施した。この授業においては、「非医療福祉系学科学生たちが医療・福祉に触れ、医療系・非医療系の際を越えて、連携の入り口に立ち、自学科の学びとの関連から社会において貢献できることを考える」「立場の違う人のしあわせについて考える」ことができることを目標にしている。2020年度は対面ではなくオンラインでの疑似体験となったが、体験後の学生たちのレポートからは、動画視聴や講義形式であっても、学びを得られたことが読み取れた。図3に建学科目「しあわせを考える」授業について、参加学生の感想をまとめ、発表したポスターと授業プログラムの詳細を示した。

また、2020年度寄付講座1「高齢者の健康」においても、「むさしのIPE」メンバーが半数の授業を担当した。全学科全学年の学生が履修可能なこの授業においては、メンバー所属学科の専門職の立場から、「すべての人のしあわせ=well-being 健康や福祉」を考える」ことができる授業を実施した。

#### ④ 他大学 IPE 視察

2018年12月には、千葉大学 IPE を視察した。医学部、薬学部、看護学部、および近隣大学の医療系学生が参加する授業、かつ1～4年生までの縦断で実施している IPE では、学生たちが積極的に発言していた。横断と縦断という理想的な授業展開に圧倒された。視察終了後にプログラム担当教員から「授業ではない IPE は IPE ではない」と厳しい指摘を受け、返す言葉がなく、授業にしたいと強く思った。本学では難しいことと思われたが、建学科目「しあわせを考える」授業担当から、できることもあると考えた。

#### ⑤ 研究発表

これらの成果、非医療福祉系学科学生に実施した「しあわせを考える」授業については、メンバーが個々に所属している学会、またメンバー全員がグループ会員となっている日本保健医療福祉連携教育学科において発表した。<sup>注</sup>

### 3 今後の展望

これまで「むさしの IPE」の活動について報告してきた。それらを「世界のしあわせをカタチにする」しあわせ研究の視点から振り返り、その効果と今後の展望について、以下に述べる。

### (1) 連携継続の重要性

「むさしの IPE」の活動については、6 年間 70 回を超えるミーティングを通して連携を継続してきたことが重要であると考えます。メンバーも当初の 2 名から、現在は 11 人となった。まさに「継続は力なり」であり、連携や協働が拡張している。

しかし 2020 年度当初は看護学部の有明キャンパス移転を控え、武蔵野キャンパスとの距離が生じること、定例ミーティングの開催方法に危機感を抱いていた。ところが、新型コロナウイルス感染症予防の観点から導入となったオンラインが、ミーティングの継続を可能とした。ピンチがチャンスとなったのである。

このように連携の機会を設け、メンバーが知恵を出し合って、継続する姿勢を維持することが重要と考えます。メンバーの所属は、学内にとどまらず、大学外にも拡張している。2 キャンパスでのメンバーの連携に加え、客員研究員との連携についても、オンラインを積極的に活用した連携の継続が重要と考えます。

### (2) 「世界のしあわせ」をカタチにする－SDGs 目標 3 達成を見据えて－

70 回を超える定例ミーティングでのメンバーの交流と連携は、メンバーにしあわせをもたらしている。メンバーは、その中で企画されたイベント、授業を実施することができることにもしあわせを感じている。なにより、イベントや授業を通しての学生の素直な反応、また学生が学びを得て、学びを深め成長することにメンバー全員がしあわせを感じている。医療・福祉系学科学生においては、医学部を有してはいないが、社会福祉学科、言語聴覚コースを有する本学において、イベントであっても交流する機会があることが、理解の第 1 歩となっていると考えられる。

しかしながら、一昨年千葉大学 IPE の視察において、「むさしの IPE」の活動は「授業ではない IPE は IPE ではない」と厳しい指摘を受けた。だが、他学科学生参加の IPE、また非医療系学科学生参加の建学科目「しあわせを考える」における技術体験型の授業実施において、非医療系学生であっても、所属学科における学びや経験を医療において役立てるという視点から共感が得られる感触を得た。この成果は、既存の IPE から拡張した学科横断型の取り組みにも持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: 以下、SDGs とする) 目標 3「す

べての人に健康と福祉を」を達成する可能性を示唆している。世界が新型コロナウイルス感染症による緊急事態に至っている現在、本学学生が医療福祉の体験から自らの学びや経験を活かし考える機会を持つことでSDGs 目標3の達成に近づくと考えた。

SDGs 達成のために重要となるエンパワメントやパートナーシップは、医療・福祉職に必須な概念である。むさしの IPE メンバーは、日々の実践においてそれらが無意識に用いて、病や障害を持ちながら生きている人々に関わっている。

本学には、医療・福祉系学科横断授業としての IPE は設けられていない。しかし、「むさしの IPE」メンバーが根底に有する、エンパワメントやパートナーシップを意図的に今後のイベントや授業に組み入れ、可視化して活動することは可能である。本学独自の「しあわせ研究」の一旦として、SDGs 目標3の達成につながる可能性があることを意識しながら、「むさしの IPE」として取り組むことが重要であると考えた。

#### 4 おわりに

「むさしの IPE」はこの6年間、74回の定例ミーティング、10回のイベント開催、建学科目「しあわせを考える」授業担当等の活動をしてきた。活動を通して、参加学生はイベントや授業から専門職への学びを深めるしあわせを、教員は教員同士が連携するしあわせ、学生の成長を目の当たりにするしあわせを得ていた。また、全学科を通して、非医療・福祉系学科学生が所属学科における学びや経験を健康や医療について役立てる成果があることも窺われた。

「むさしの IPE」の活動が「世界のしあわせをカタチにする」しあわせ研究の一旦として、SDGs: 目標3「すべての人に健康と福祉を」達成につながる可能性があることを意識して、今後の活動に取り組んでいきたい。

#### 謝辞

本論文は2020年度しあわせ研究費（研究テーマ：「総合大学学科横断「むさしの IPE」がめざす「SDGs Goal 3：すべての人に健康と福祉を」）の助成を受けたものです。

しあわせ研究に関してお世話になった方々、IPE イベント、建学科目「しあわせを考える」、2020年度武蔵野市寄付講座（寄附講座1）にご協力、ご尽力いただいた全ての方々に感謝申し上げます。

## 注釈

「むさしのIPE」の研究報告は以下である。発表年順に記載する。

小野真理子, 畠山恵, 小俣智子, 山本摂子, 小川潤子, 益戸智香子. (2017). 医療福祉系4学科における専門職連携教育の試み-むさしのIPE活動報告-. 第2回武蔵野言語聴覚カンファレンス.

小野真理子, 畠山恵, 小俣智子, 山本摂子, 小川潤子, 益戸智香子, 狐塚順子, 小嶋知幸. (2017). 医療福祉系4学科における専門職連携教育の試み-むさしのIPE活動報告 第1報-, 第18回日本言語聴覚学会.

畠山恵, 小野真理子, 小俣智子, 山本摂子, 小川潤子, 益戸智香子, 狐塚順子, 小嶋知幸. (2017). 医療福祉系4学科における専門職連携教育の試みが臨床実習に与える効果—むさしのIPE活動報告 第2報—. 第18回日本言語聴覚学会.

小川潤子, 小俣智子, 山本摂子, 小野真理子, 畠山恵, 益戸智香子. (2017). 医療福祉系学科連携教育の試み-医療福祉職プチ！体験ツアー報告. 第21回日本地域薬局薬学会年会.

小川潤子, 小俣智子, 山本摂子, 小野真理子, 畠山恵, 益戸智香子. (2017). 医療福祉系学科連携教育の試み-医療福祉職プチ！体験ツアー報告. 第2回Happiness Meeting.

小川潤子, 小俣智子, 山本摂子, 小野真理子, 畠山恵, 益戸智香子. (2017). 医療福祉系学科連携教育の試み-むさしのIPE活動の報告-. 第2回日本薬学教育学会大会.

山本摂子, 小野真理子, 畠山恵, 小川潤子, 益戸智香子, 小俣智子. (2018). 医療福祉系4学科専門職連携教育の試み-むさしのIPE体験ツアー活動報告-. 第28回日本医学看護学教育学会学術集会.

山本摂子, 小野真理子, 畠山恵, 小川潤子, 益戸智香子, 小俣智子. (2018). 総合大学医療福祉系4学科専門職連携教育の試み-むさしのIPE実習体験発表会

を開催して-. 第3回 Happiness Meeting.

山本摂子, 小野真理子, 畠山恵, 小川潤子, 益戸智香子, 小俣智子. (2018). 医療福祉系における専門職連携教育の試み-むさしの IPE 実習体験発表会を開催して-. 第11回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会.

山本摂子, 嶋田(小野)真理子, 畠山恵, 小川潤子, 益戸智香子, 三觜久美子, 小俣智子. (2019). 総合大学医療福祉系4学科専門職連携教育'むさしの IPE'実習体験発表会報告-看護学科学生の参加前後の変化を中心に-. 第29回日本医学看護学教育学会学術集会.

嶋田(小野)真理子, 畠山恵, 小俣智子, 山本摂子, 三觜久美子, 小川潤子, 益戸智香子, 狐塚順子, 小嶋知幸. (2019). 医療福祉系4学科専門職連携教育「むさしの IPE」の試み:学習の進捗と参加意義についての検討. 第20回日本リハビリテーション連携科学学会.

山本摂子. (2018). 「むさしの IPE」がめざすしあわせのカタチ. (2018). しあわせ研究所通信, 15, [https://www.musashino-u.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00008952.pdf&n=Report\\_Vol.15.pdf](https://www.musashino-u.ac.jp/albums/abm.php?f=abm00008952.pdf&n=Report_Vol.15.pdf)

山本摂子, 嶋田(小野)真理子, 畠山恵, 益戸智香子, 高尾良洋, 吉井智子, 三觜久美子, 小俣智子. (2019). 総合大学における医療福祉系4学科専門職連携教育'むさしの IPE'が医療系以外の学科学生を対象に実施した体験型授業報告. 第12回日本保健医療福祉連携教育学会学術集会.

山本摂子, 嶋田真理子, 畠山恵, 稗田里香, 小俣智子, 益戸智花子, 高尾良洋, 吉井智子, 栃原綾, 後藤優子, 三觜久美子. (2020). むさしの IPE 活動報告ー建学科目「しあわせを考える」授業担当と定例ミーティングー, 第5回 Happiness Meeting.

#### 引用文献および参考文献

新井利民, 田口孝行, 川俣実. (2018). 埼玉県立大学における段階的な IPE の実施. *看護展望*, 43(9), 0818-0825.

朝比奈真由美. (2011). プロフェッショナルへの初期教育の実際 専門職連携教育 (IPE) —質の高い専門職連携 (IPW) をめざす卒前教育—. *日本内科学会雑誌*, 100(10), 3100-3105.

- 榎田めぐみ, 木内祐二, 片岡竜太, 田中佐知子, 佐口健一, 倉田知光, 下司映一.  
(2018). 卒業まで一貫した4学部連携のIPEを実施 昭和大学の体系的, 段階的なチーム医療学修カリキュラム. *看護展望*, 43(9), 0833-0841.
- 小山幸代. (2018). 15職種を育成する特性を生かしたプログラム「オール北里チーム医療演習」の報告. *看護展望*, 43(9), 0826-0832.
- Leathard A. (1994). *Going Inter-Professional; Working together for health and welfare*. London: Routledge.
- 真柄彰. (2018). イギリスでの学びを生かしたIPE, 連携総合ゼミとは. *看護展望*, 43(9), 0809-0816.
- 牧野孝俊, 松井弘樹, 時田佳治, 李範爽, 蒲章則, 岸美紀子, ... 渡邊秀臣. (2018a). 群馬大学多職種連携教育研究研修センターの調査によるIPEの現状. *看護展望*, 43(9), 0791-0797.
- 牧野孝俊, 金泉志保美, 篠崎博光, 齋藤貴之, 安部由美子, 山路雄彦, ... 田中和美. (2018b). 全人的医療とチーム医療に貢献できる人材の育成を目指して群馬大学の多職種連携教育. *看護展望*, 43(9), 0842-0848
- 長田律子. (2019). 福祉医療系専門学校における連携教育に関する研究—卒業生へのアンケート調査を通して—. *太成学院大学紀要*, 21, 57-66.
- O'Carroll, V. et.al (2016). Health and social care professionals' attitudes to interprofessional working and interprofessional education, A literature review. *Journal of Interprofessional Care*, 30, 42-49.
- 小河原はつ江, 中徹, 藤田清貴. (2018). 看護職以外の他職種から見たIPE 臨床検査技師の視点から. *看護展望*, 43(9), 0909-0915.
- 齋藤順子. (2018). 看護職以外の他職種から見たIPE 言語聴覚士の立場から考える多職種連携の意義 リハビリテーション専門職におけるIPE. *看護展望*, 43(9), 0916-0920.
- 佐藤進. (2009). 序章 なぜ今, 連携なのか. 埼玉県立大学 (編) *IPWを学ぶ利用者中心の保健医療福祉連携*. 東京: 中央法規.
- 外里富佐江. (2018). 看護職以外の他職種から見たIPE 作業療法士の視点から「専門職アイデンティティ」の獲得に必要なこと. *看護展望*, 43(9), 0902-0908.

山本武志, 苗代康可, 白鳥正典, 相馬仁. (2013). 大学入学早期からの多職種連携教育 (IPE) の評価—地域基盤型医療実習の効果について—. *京都大学高等教育研究*, 19, 37-45.

渡邊秀臣, 牧野孝俊, 蒲章則, 篠崎博光, 松井弘樹, 時田佳治, . . . 鎌田英男. (2018). 多職種連携とその必要性. *看護展望*, 43(9), 0774-0779.